多言語教育の現状と将来

報告者
小池　誠　（桃山学院大学 国際教養学部 教授）
円谷　恵　（国際基督教大学 事務局長）
吉田　泰謙　（関西外国語大学 国際言語学部 准教授）

コーディネーター
遠藤　央　（京都文教大学 総合社会学部 教授）

楽天が英語を社内公用語するという試みが象徴的であるように、外資系だけでなく、日本の企業においても、日本語だけで一生勤務できるかどうかの岐路に来ているように思える。大学生の就職活動を日本語だけでおこなうのか、英語その他の言語も選択肢にいれておこなうことができるかどうかで、将来設計がおおきくかわっていくことが予想される。東京大学がバイリンガル、トリリンガルのエリート教育構想を検討していると聞くが、多言語教育をエリート教育だけに限定するのかどうかも問われていくだろう。そこで、多言語教育の現状を把握し、カリキュラムをどのように再編成していくことが可能かを考えたい。短期の語学留学を含む留学や留学生の受け入れを積極的におこなっている大学のカリキュラム内容やその評価などを出発点に、多言語教育の将来を考えてみたい。

＜第５分科会＞

多言語教育の現状と将来

参加人数	31名	
報告者		
第１報告者	小池　誠	（桃山学院大学 国際教養学部 教授）
第２報告者	円谷　恵	（国際基督教大学 事務局長）
第３報告者	吉田　泰謙	（関西外国語大学 国際言語学部 准教授）
コーディネーター	遠藤　央	（京都文教大学 総合社会学部 教授）

分科会のねらい

東南アジアではすでに90年代に、イギリス、アメリカ、オーストラリアなどの大学が
進出し、英語教育を軸とした多言語人材の育成競争がはじまっていた。

日本でも、楽天が英語を公用語化するという試みが象徴的であるように、多言語での労働環境が導入される可能性が高くなってきている。就職活動を母語という単一の言語だけでおこなうか、英語その他の言語も選択肢にいれておこなうことができるかで、大学生の将来設計がおおきくかわってくることが予想される。

そこで、多言語教育の現状を把握し、カリキュラムをどのように再編成していくことが可能かを考えてみたい。

短期の語学留学を含む留学や留学生の受け入れを積極的におこなっている大学のカリキュラム内容とその評価を出発点に、多言語教育の将来を考えてみたい。

報告の概要

桃山学院大学の小池誠教授は、同大の文学部が国際教養学部に改組した際の学部長であり、改組の目的、カリキュラム編成の内実、多言語教育の実際などについて具体的に報告していただいた。多言語教育をカリキュラムとして維持する苦労がよくわかる報告であった。

国際基督教大学の円谷恵事務局長には、発足以来日本語と英語のバイリンガリズムにもとづいて教育、研究、運営がなされている大学の実際を、教員ではなく職員サイドから報告いただいた。教職員が情報を共有できるようにするために、日英両語で事務運営を日々おこなうことの大変さがよく理解できる内容であった。

関西外国語大学国際言語学部の吉田泰謙准教授は、中国語を担当されており、中国語専攻のカリキュラムと学生の現状を報告いただいた。中国語の重要性はこれからますます高まっていき、専攻する学生も増加すると予想され、中国語を重点化する大学が増加すると思われるので、貴重な内容であった。

それぞれのご報告の詳細については、各報告者の報告を参照していただきたい。

報告に対する質疑ならびに全体討議の内容

最初に質問用紙に対する応答をおこない、後半では自由な議論をおこなった。参加者のほぼ全員の方が発言できたと思われる。

制度に関して、入試の状況、カリキュラム運営の実際、短期留学の場合の単位取得の状況、留学の際語学以外の正課の授業をどのようにしているのか、などの質問があったので、各大学の具体例を話していただいた。

国際基督教大学では、寮で留学生と日本人学生を同室にしてたがいの語学力、異文化理解能力を高めるようにしているが、英語で話してしまう、また英語での授業も多いので、留学生の日本語能力が高まらないことが指摘された。そのため、相互の交流をはかる具体的な試みについての質問があった。

全体討議では、語学能力以外の論理性や表現力がやはり大事であり、語学はできるがレポートの内容が幼稚な学生も散見されるので、カリキュラム編成

に工夫がいることが指摘された。

また、多言語教育の根幹にあるのは母語の能力であるので、そこをしっかりと鍛えないといけないだろうという点では、報告者や参加者の多くの意見が一致した。

語学重視の大学・学部ではなく、他に専門を持つ大学・学部における「ツールとしての外国語」を論じる分科会も必要だという意見があった。専門によっては、日本での就職が困難なため、海外での就職を視野に入れないとやっていけないということであり、多言語で将来を設計する必要性は、日本でもすでに、そして大いにあるということである。

桃山学院大学国際教養学部の多言語教育とその課題

桃山学院大学 国際教養学部 教授　　小池　誠

１　本報告の目的

2008 年 4 月にスタートした桃山学院大学国際教養学部が目指す多言語教育の目標と、それが直面している問題点を明らかにした上で、今後、取り組むべき課題を考えたい。初代の学部長を務めた経験から、学部教育における外国語教育の位置づけに重点をおいて報告する。

２　国際教養学部の多言語教育

（１）文学部から国際教養学部への改組

既存の文学部英語英米文学科（入学定員 80 名）と国際文化学科（入学定員 130 名）を廃止し、2008 年度に国際教養学部国際教養学科（入学定員 270 名）を設置した。改組の概要は下記に示す通りである。

国際教養学部の教育理念を一言で表せば、桃山学院大学の建学の精神の一つである「世界の市民の養成」である。グローバル化が進展する 21 世紀の世界において、幅広い教養をもち、氾濫する情報に流されることなく主体性をもって行動する「世界の市民」を育てることが、国際教養学部の第一の目標である。本学部では「実践的英語力の涵養」、「多文化共生をめざす国際理解の促進」、「発信型の異文化コミュニケーション能力の育成」、「現代の諸問題への対応」の４つの柱を掲げて、国際社会で幅広く活躍できる人材を送り出そうとしている。

国際教養学部では上記の教育目標を達成するために、英語コミュニケーション専修、ヨーロッパ・アメリカ文化専修、アジア文化専修、Japanese Studies 専修、メディア・映像文化専修という５つの専修を設けている。

文学部から国際教養学部への改組にさいして、外国語教育カリキュラムにおける変更点は以下の通りである。

1 年次と 2 年次の必修科目である初修外国語（ドイツ語・フランス語・スペイン語・イタリア語・ロシア語・中国語・韓国語・インドネシア語から一つを選び、週 2 コマで合計 8 単位を必修とする）については、国際教養学部でもそのまま維持することとした。

英語教育について文学部のカリキュラムでは、学科ごとに必修の単位数が違っていた。英語英米文学科では、1 年次と 2 年次で英語 20 単位を学科必修科目として、国際文化学科では、１年次と２年次で英語 12 単位を学科必修科目として定めていた。

国際教養学部は１学部１学科であり、1 年次と２年次で合計 16 単位の英語科目を必修とすることとした。ただし、英語を集中的に教える英語コミュニケーション専修だけは、他の専修とは異なる英語教育のカリキュラムを定めた。「英語特待生留学制度」を用意し、1 年次秋学期または２年次春学期に、海外の提携校に半年間留学させることにした。留学の成果をもとにして、２年次秋学期以降にできる限り多くの学生を海外の大学に長期留学させることを目的としている。また、他の４専修と違って、英語コミュニケーション専修では３年次に「上級英語」８単位を必修としている。

（２）多言語教育の特色

①　語学研修と留学を組み込んだ外国語教育プログラム

教室内の授業だけでは外国語習得にとって限界がある。国際教養学部独自の教育課程に組み込まれた海外語学研修は上記の「英語特待生留学制度」及び「日本語教育実習制度」であるが、本学部の学生は長期派遣留学と短期語学研修などの国際交流プログラムを活用して、海外に出て異文化体験を通して、外国語をより深く学習することが望まれている。とくに学生が下記のような段階を踏んで、より高いレベルの外国語を習得することを意図している。

動機付け授業：「世界体験入門」（１年次春学期）と「海外研修セミナー」（１年次の春休み）

↓

短期語学研修（夏休みと春休み中の３～４　週間）

英語については、カナダ、アメリカ、イギリス、オーストラリアの合計５大学、英語以外の初修外国語（インドネシア語を除く）についても 11 大学で実施している。

↓

長期派遣留学（半年または 1 年間）

英語圏のカナダ、アメリカ、イギリス、オーストラリアはもちろんとして、フランス、オランダ、ドイツ、オーストリア、スウェーデン、インド、ベトナム、韓国など 14 ヵ国の計 30 大学において、英語を媒介語とする講義を履修できる留学を実施している。さらに、初修外国語科目のすべての言語を現地で学ぶための長期留学制度を 25 大学で実施している。

②　提携校からの交換留学生との交流

イタリア語の授業では、イタリア人留学生を積極的に活用している。その一つの成果として毎年、イタリア語劇を上演している。2012 年 12 月 13 日に、イタリア人留学生と本学学生によるミュージカル「Progetto Westside Story」を上演し、イタリア人留学生は日本語で、本学のイタリア語受講者はイタリア語で台詞を言った。なお、イタリア語の台詞の練習は初修外国語の授業中に行っているが、イタリア語劇自体の準備と上演は、放課後を利用して授業とは別の課外活動として実施している。

（３）多言語教育の現状

初修外国語の中でもっとも受講者が多いのは、表１に示すように中国語である。韓国語は、K-POP など韓流の人気が関係し、以前よりも受講者が増える傾向にある。ヨーロッパの言語の中では、スペイン語とイタリア語が受講者が多くなっている。反対に、受講者が少ないのは、インドネシア語とロシア語である。本来は、履修登録の前に新入生に対してオリエンテーションを開いて、新入生になじみのない外国語の魅力を紹介する機会を設定できれば、ロシア語やインドネシア語の受講者が少しでも増えると考えられる。しかし、履修登録期間の関係で、それは困難であり、現状では新入生向けの冊子でそれぞれの言語および文化の紹介をしているだけである。

表１　初修外国語の受講者数

	ドイツ語	フランス語	スペイン語	イタリア語	ロシア語	中国語	韓国語	インドネシア語
2012 年度 1 回生	26	26	43	44	2	82	82	7
2012 年度 2 回生	18	29	51	47	2	103	39	7
	44	55	94	91	4	185	121	14

表２　留学者数の推移

	2008 年度	2009 年度	2010 年度	2011 年度	2012 年度
大学全体	58	72	75	54	48
国際教養学部	52 (90.0%)	55 (76.4%)	60 (80.0%)	48 (88.9%)	48 (100%)

表３ 語学研修参加者と留学者数の推移（英語圏を除く）

	2008 年度	2009 年度	2010 年度	2011 年度
短期語学研修	22	17	25	17
長期留学	11	7	7	5＊

＊中国１名、台湾２名、韓国２名

半年または１年間の海外交流校への長期留学者数の推移を表２で示した。残念ながら、大学全体だけでなく国際教養学部についても減少傾向にある。これは本学だけでなく、日本全体で問題となっていることである。つづいて表３をもとにして、英語圏を除く、本報告で取り上げる多言語教育に関係する諸外国への短期語学研修の参加者と長期留学者の推移について述べる。文学部から国際教養学部への改組に伴い、海外で学ぶ意欲のある学生をより多く育てようと考えていたが､残念ながら現時点ではその目標は達成できていない。短期語学研修については年によって多少変化があるが、長期留学については明らかに減少している。2011 年度の留学先が東アジアの大学で占められていて、ヨーロッパ諸国や次に述べるようなインドネシアへ留学を希望する学生が出ていないのが、留学者数全体の推移に関係している。これは、本報告の最後に述べるように国際教養学部が取り組むべき重要な問題である。

３ 理想とする多言語習得モデル

国際教養学部が理想とする多言語習得モデルを紹介したい。2008 年に文学部英語英米文学科を卒業した女子学生のケースである。文学部時代の学生であるが、この学生のように英語だけでなく、それ以外の言語を留学経験を通して習得し、それを就職に生かすというのが、国際教養学部でも理想とされるモデルである。

２年次の 2005 年夏に本学が主催する国際ワークキャンプに参加し、インドネシア・バリ

島の児童養護施設でボランティア活動を行った。ワークキャンプで出会ったインドネシアの子どもたちが置かれている現状に強い関心をもつようになり、３年次から１年間、インドネシア・スラバヤのペトラ・キリスト教大学に留学した（協定締結後、最初の留学生である）。経済学部観光学科でインドネシアの観光事情（英語の講義）を学び、文学部では英語とインドネシア語を学んだ。留学中、COP （Community Outreach Program）プログラムにも参加した。これは、ペトラ・キリスト教大学の学生が中心となり、オランダ・韓国・香港・日本（本学と国際基督教大学）から集まった学生とともに東ジャワの農村でボランティア活動を実施するというプログラムである。本学を卒業後、直接インドネシアで就職活動をして、インドネシア語と英語を使ってジャカルタの大手日系自動車会社で日本人トップの秘書役として働くようになった。

４　多言語教育の問題点と課題

国際教養学部が直面する問題点は下記の通りである。

第一に、単位修得のみを目的とする初修外国語の受講者の存在を挙げることができる。「英語だけで十分という学生の声」に代表されるように、一般に初修外国語学習に対する意欲に乏しい学生が多いといえる。このことは、受講者が初修外国語の習得を将来の仕事と結びつけて考えていない傾向とも関連するし、残念ながら、一部の担当教員にも同様の考えがある。

第二に、「２国際教養学部の多言語教育（３）多言語教育の現状」で具体的に説明したように、長期留学希望者の減少傾向がある。一般的にいって、外国語担当者の熱意によって留学希望者の数は左右される。受講者の留学につながらない外国語授業の内容も問題であるし、また今日の学生が長期留学を就職活動にとってマイナスと考えがちであることも、留学希望者の減少につながっていると考えられる。

上記のような問題点を少しでも良い方向に改めるための課題として、とりあえず必要なことは次の２点である。第一に、当該の言語だけでなく文化全般に関心を抱かせるように、初修外国語の授業を受講者にとって、より魅力的な内容にすることが求められている。第二に、１年次の学生にもっと海外留学に目を向けさせるように、講義と１年次のゼミ（大学入門セミナー）の内容を充実させることが必要である。

国際教養学部の外国語授業を担当する教員のなかには、「初修外国語を必修から外し、意欲のある学生だけに履修させた方がよいのではないか」という意見もある。しかし、「国際教養学部の大きな特色の一つは八か国語が初修外国語として用意されていることであり、それこそが『国際教養』を名乗ることのできる理由でもある」［2012 年 6 月『国際教養学部完成年度総括』から］という原点を大事にして、多言語教育を今後も進めていきたいと考えている。

桃山学院大学の学生に限らず、全国の大学で、学生の日本語を書く力自体が低下しているという現実がしばしば指摘される。多言語教育という理想を追うよりも、日本語の書く力の向上を優先すべきだという声も当然耳を傾けるべき意見である。この問題は、各大学の学部教育の目標と結びつけて論じるべき問題であろう。すでに述べたような国際教養学部の教育理念を具現化するためには、英語と初修外国語という二つの言語を教育カリキュ

ラムに取り込むことが必須であると考えている。当然、外国語教育と並行して、日本語でディスカッションする力と、論理的な文章を書く力の育成も進めるべきであり、この二つは相反するものではなく、相互にプラスに作用するものである。

ICU におけるバイリンガリズム

国際基督教大学 事務局長　　円谷　恵

1. ICU の献学の理念

国際基督教大学(ICU)は、第二次世界大戦への深い反省から、自由な民主日本を築き、人類社会の平和的発展に寄与する人材を育成することを目指して、1953 年に開学した。その前年に当時の文部省に提出された「大学設置認可申請書」には、『大学の目的と使命』として、「学問の自由を操守し、総合研究を奨励する」、「教育に精進し、たえず批判と評価を通してその進歩改善に努力する」等と並んで、「教授は本邦のみならず、広く世界各国に亘ってこれを求め」、「学生は人種、国籍、宗教の如何を問わず、本学建学の趣旨に共鳴して入学を希望する者の中より、厳選収容」のうえ、「日英両語を学園用語として国際的学園生活を実現」し、「世界的エトスの確立を期する」と謳われている。さらに、本学要覧第 1 号（1953-1955)には、新しいヴィジョンのもとに創られた大学の志が、「本学は国際協力のもとに設立され、国際文化と理解への実験場として独自の国際社会を学内に実現し、世界共同体の可能性を立証せんとするものである。」と表明された。　（「グローバル人材育成事業」申請調書より）

本日は、「日英両語を学園用語とする」という献学の精神がどのように実現されているかを紹介したい。教室の中ではもちろん、キャンパス内に居住する教員や学生の生活の中でも、日英両語を使った大学運営がなされるように努力されている。

2.　多様な構成員と日英両言語による大学運営

まず「設置認可申請書」に「教授は本邦のみならず、広く世界各国に亘ってこれを求め」とあるとおり、教員の採用は国際公募を行っており、現在、外国籍の専任教員の割合は全体の３割を超えている。学内に教職員住宅があり、着任する新任の外国人教員には優先的に入居できるよう配慮されている。また、ICU は献学以来、海外で教育を受けて来た外国人学生や帰国生を９月に入学させる制度を持っている。入学選考は来日して入学試験を受ける必要はなく、書類による選考であり、渡日前に合否の結果を出すことも、今では珍しいことではないが、ICU では伝統的に行ってきており、海外にいることで不利益のないように配慮されてきた。

入学式、卒業式、大学礼拝などは両方の言語で行われ、通訳がつかない場合にも翻訳された式辞を配布するなどの工夫をしている。教職員も可能な限り日英両語を理解できることが求められているが、言語の問題で重要な情報の共有が妨げられないように配慮されている。例えば、学内の規程、お知らせ、申請用紙、会議資料などは基本的に両言語で作成されている。教授会のみ同時通訳が入るが、他の委員会などの会議の場合は、メンバーによって使用言語を決める、あるいは委員がそれぞれ得意な言語で発言する、隣に座っているメンバーが必要に応じて簡単に通訳するなどの工夫がなされている。

この項目について、どのように教職員の理解を得るのかという質問を頂いた。もちろん個人差はあるが、実際に仕事を進める上で不可欠であり、また「言語のために理解できない人を作らないようにする」という趣旨はある程度理解されていると考える。

3. 語学要件

ICU では、英語を母語としない４月入学生は「リベラルアーツ英語プログラム」(ELA: English for Liberal Arts Program) 、日本以外の教育制度で教育を受けてきた９月入学生は「日本語教育プログラム」が必修となっており、卒業要件にもなっている。これは、卒業までに両言語

での学問が可能となるように考えられたものである。ELA を履修する４月入学生は、入学時のクラス分けテストにより、４段階(TOEFL iBT100 以上から同 20-30 まで) に分けられ、きめ細かな習熟度別教育が行われている。しかし、この必修の語学プログラム以外の科目は、４月生、９月生の区別なく同じ科目を履修する。これは、交換留学生についても同じである。

4. 開講言語

科目番号には必ず開講言語が明記されている。J は日本語開講、E は英語開講を表している。中には J,E あるいは J/E などの表記がある。例えば下記 J,E となっているコースは英語を使用する教員と日本語を使用する教員のチームティーチングになっている。日本語開講の学期と英語開講の学期がある場合にも使われる。次の J/E は授業の中で主として日本語を使用するが、参考文献が英語であったり、部分的に英語を使うことを意味している。E/J はその逆を表す。

GEX001 J,E

X: Introduction to Christianity

The basic concepts of the Christian faith. The study, based on the Bible, is directed toward understanding Christianity's theological significance in relation to various fields of modern culture. Required of all students seeking a degree. Language of instruction differs by term or section.

GES051 J/E

S2: Media and Cultural Signs

The course examines how meaning is socially constructed through media. Semiotic analysis allows us to reveal the meanings of various signs which we may overlook in everyday life and to open up the possibility of different interpretation.

語学の問題によって科目履修に支障が出ないよう、まずは科目一覧の開講言語の表記を見て、学生は自分が履修可能な科目であるかどうか確認する。しかし、実際に履修するにあたっては、語学力が不十分なために、ついていくのが難しい学生が出て来る場合もある。そのような時には、教室内あるいはオフィスアワーを利用して学生の母語で補足説明をしている教員もいる。また、授業をどちらの言語で行うかは履修する学生の状況によって決められる科目もある。最近では Learning Management System を使って、母語でない学生が予習復習をやりやすいように工夫している教員も増えている。

5. 寮生活

学生にとって、両言語での体験をできる重要な場所として学生寮がある。キャンパス内には独立した 10 棟に加え短期留学生寮があり、六百数十人の学生が生活している。短期留学生寮を除いては、基本的に日本人学生と外国人学生が同室となるように割り当てられている。ここでもバイリンガルの原則は守られており、掲示やお知らせはほとんど両言語で作成されている。また、ほとんどの寮では通訳担当の学生が決められており、寮会などでも言語のために理解できない学生がいないように配慮されている。

一般的に外国人学生と日本人学生に分かれてしまっていることはないかという質問を頂いたが、交流の一番よい方法は、やはり同じ教室で同じ授業を履修できることだと考える。成績がつくということもあり、真剣にディスカッションやグループワークなどに取り組む中で、本当に親しくなることができるのではないか。

6. バイリンガリズムの意義と問題点

二つの言語を使う意義は何か。それは単に外国語習得のためではない。違う言語を使うということは、文化的背景も価値観も違うということである。多様な人々と共に暮らし、学ぶ。自分の物の考え方や見方はおかしいのか？なぜ、対立が起きるのか？違う人間とうまくやっていくにはどうしたらいいのか？教室で、寮で、学生は常に自分に問いかけなければならない。例えば同じ英語を使っても、仲のいい友達と話す時もあれば、先生のように、気を遣って話さなければいけない相手もいる。自分のおかれた状況に合わせて、適切な言語を使ってコミュニケーションを図る。少数であっても理解できない人を作らないためにはどうしたらいいのか。学生だけでなく、大学の構成員全員が常にそのことを考えなければならない。そのことによって他者と共に生きることを学ぶ。

上記にあげたように、二つの言語を使うことは語学力習得のためだけではない。しかし、限られた期間しか滞在できない留学生にとってはやはり語学力の向上は大きな課題である。日本語による授業だと思って登録したところ、外国人が多くいることから英語での授業に変わってしまった。自分は日本の大学に留学しているのに、なぜ勝手に言語を英語にしてしまうのか。あるいは、寮の学生が皆英語が得意なので日本語を話す機会が少ない。ICU では逆に日本語を使用する機会が少ないというのが留学生の不満の原因になることもある。本来の目的を失わずに、両方の言語を使っていくことは易しいことではない。しかし、様々な苦労や工夫を重ねて大学生活を送るうちに、学生には本当の国際社会で生きていくための知恵と能力を身につけていってもらいたいと願っている。また、私たち教職員も日々成長していくことができる。

7. これからの課題

今後取り組んでいくべき課題としては、特に書く力をどのように身につけさせるかということだと認識している。昨年採択された「グローバル人材育成事業」の中の一つの柱は「Writing による情報発信能力の涵養」となっている。2013 年度から、科目の担当教員の他に、英語でのレポート作成のサポートをしてくれるチューターを配置した W-Course を設置しようと現在準備中である。

また、いわゆる第二外国語（あるいは第三言語）の習得についても、今後は力を入れたいと考えている。カリキュラムが非常に混んでいるため、「海外フランス語研修」という形で夏期に集中的に単位を取るプログラムを実施している。また、今年から「韓国サマープログラム」も開始し、希望する学生は韓国語の学習もできる。夏期を利用したプログラムの開発は今後も開拓していきたい。

ICU
INTERNATIONAL CHRISTIAN UNIVERSITY
60th Year

大学コンソーシアム京都FDフォーラム
2013年2月24日

ICUにおける バイリンガリズム

国際基督教大学
事務局長
円谷　恵

1

ICU

2　2013年2月24日

1．ICUの献学の理念
2．多様な構成員と
　　日英両言語による大学運営
3．語学要件
4．開講言語
5．寮生活
6．バイリンガリズムの意義と問題点
7．これからの課題

大学コンソーシアム京都FDフォーラム

ICU

3　2013年2月24日

1．ICUの献学の理念

1953年に開学

「大学設置認可申請書」

『大学の目的と使命』

「日英両語を学園用語として国際的学園生活を実現」し、「世界的エトスの確立を期する」

大学コンソーシアム京都FDフォーラム

ICU

4　2013年2月24日

2．多様な構成員と 日英両言語による大学運営

教員の採用は国際公募
　外国籍の専任教員の割合は全体の３割超
「教授は本邦のみならず、広く世界各国に亘ってこれを求め」（「設置申請書」）

学内には教職員住宅があり、外国籍教員は優先的に入居できる。

大学コンソーシアム京都FDフォーラム

ICU

5　2013年2月24日

2．多様な構成員と 日英両言語による大学運営

- 規程・会議資料、申請用紙、配布物はすべて日英両語で作成
- 教授会は同時通訳付き
- 日常の会議はメンバーによって使用言語決定

大学コンソーシアム京都FDフォーラム

ICU

6　2013年2月24日

3．語学要件

４月入学生
「リベラルアーツ英語プログラム」
（ELA: English for Liberal Arts Program）

習熟度別　Stream 1~ Stream 4
達成目標は同じであるが、スピードが異なる。

大学コンソーシアム京都FDフォーラム

7 2013年2月24日

ICU

3．語学要件

９月入学生
(日本以外の教育制度で教育を受けてきた)
「日本語教育プログラム」
「集中日本語 I－III」「日本語 1-8」
「上級日本語」
「特別日本語A-C」

大学コンソーシアム京都FDフォーラム

8 2012年2月24日

ICU

4．開講言語

J　日本語開講
E　英語開講（全体の約２５％）
J，E　学期によって英語の場合と日本語の場合がある
　　担当する教員によって日本語の日と英語の日がある　など
J/E　講義は日本語で行われるが参考文献は英語
　　レポートや試験は英語可　など

大学コンソーシアム京都FDフォーラム

9 2013年2月24日

ICU

5．寮生活

基本的に日本人と外国人学生が同室となる

寮会・掲示物も日英両語で

文化背景・生活習慣を乗り越えて共生を学ぶ

大学コンソーシアム京都FDフォーラム

10 2013年2月24日

ICU

6．バイリンガリズムの意義と問題点

異なる言語を話す人々と共に暮らし、学ぶ
→自分とは違う人間とどのように
うまくやっていくのか？

自分のおかれた状況に合わせて、適切な言語、適切な行動を選択できることが本当のコミュニケーション能力につながる

大学コンソーシアム京都FDフォーラム

11 2013年2月24日

ICU

6．バイリンガリズムの意義と問題点

留学生の語学力向上の機会を奪っている？

同じ内容を両言語で提供できるか？
授業（分野による不均衡）
規程（日本の法律に従うなら日本語？）

大学コンソーシアム京都FDフォーラム

12 2013年2月24日

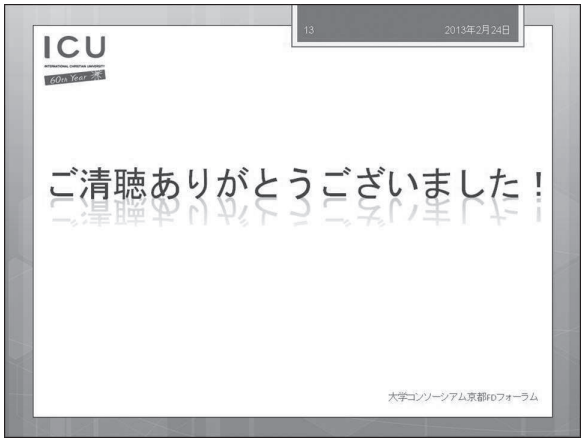
ICU

7．これからの課題

Writingによる情報発信能力の涵養
W-Courseの設置

第二外国語の習得について
夏の海外研修の利用
海外フランス語研修
韓国サマープログラム

大学コンソーシアム京都FDフォーラム


13
2013年2月24日
ICU
60th Year
ご清聴ありがとうございました！
大学コンソーシアム京都FDフォーラム

関西外国語大学国際言語学部における多言語教育の取り組みと課題
―中国語コミュニケーションコースを中心に―

関西外国語大学 国際言語学部 准教授　　吉田　泰謙

1. 関西外大について

〈建学の理念〉

関西外大の歴史は、太平洋戦争が終わった昭和 20 年、大阪市東住吉区に創立された谷本英学院にさかのぼります。敗戦に打ちひしがれた廃虚の中で、二度とあのような戦争を繰り返してはならないとの強い決意を、外国語教育に託して、第一歩を踏み出しました。

建学の理念には「国際社会に貢献する豊かな教養を備えた人材の育成」と「公正な世界観に基づき、時代と社会の要請に応えていく実学」の灯が高々と、誇りをこめて掲げられました。（「大学ホームページ」より抜粋）

〈学部構成〉

この建学理念と教育精神に基づき、本学では学部・大学院等を下記の通り設置し、外国語教育に取り組んでいる。

- ◆ 英語キャリア学部…（入学定員 120 名）　・英語キャリア学科
- ◆ 外国語学部……（入学定員 1450 名）　・英米語学科　・スペイン語学科
- ◆ 国際言語学部……（入学定員 700 名）　・国際言語コミュニケーション学科
- ◆ 短期大学部……（入学定員 800 名）　・英米語学科
- ◆ 大学院　　・外国語学研究科（英語学専攻、言語文化専攻）
- ◆ 留学生別科

本報告では、本学における学部教育のなかで、とりわけ多言語教育に重点をおいて人材育成を行っている「国際言語学部」の取り組みと課題について、「中国語コミュニケーションコース」を中心に紹介する。

2. 国際言語学部国際言語コミュニケーション学科

〈人材養成目的〉

国際言語学部では、「『英語力＋多言語』で世界へ飛び立とう！」というキャッチフレーズのもと、次のような人材育成を目標に掲げ、教育活動に取り組んでいる。

> 英語および日本語を中心に、中国語、フランス語、ドイツ語から選修した一言語をコミュニケーション・ツールとして言語運用能力の向上を図るとともに、ビジネス界で必要とされるマネジメント能力、課題探求能力、問題解決能力、自国文化を発信できる高度なコミュニケーション力を基盤に、社会が要請する人間力を備えた人材の育成を目的とする。

〈カリキュラム〉

そこで 1、2 年次の基礎教育段階では、次に挙げる 5 コースから一つを専修し、「英語＋α」の力を身につけるための第一歩を踏み出す。

【1、2 年次】
①「国際メディア英語」コミュニケーションコース
　時事問題を中心に、新聞・雑誌・テレビなど様々なメディアで使われる英語を学び、英語によるコミュニケーション能力を高める。
②「中国語」コミュニケーションコース
　「英語＋α」の多言語を修得する。1、2 年次で基礎を学び、上位年次では交換留学の道も開かれている。
③「フランス語」コミュニケーションコース（同上）
④「ドイツ語」コミュニケーションコース（同上）
⑤「国際ビジネス」コミュニケーションコース
　海外の企業も視野に入れ、ビジネスの世界で働くためのコミュニケーション能力やマネジメント力を身につける。

そして 3、4 年次では、次に挙げる 7 領域（「インテンシブ科目」）から主専攻を一つ選び、2 年次までの科目履修の学修によって習得した専門基礎知識・能力等をさらに集中的に強化し深めるとともに、より幅広い知識と高度なコミュニケーション力の習得を目指す。
【3、4 年次】
①「英語」インテンシブ
②「国際ビジネス」インテンシブ
③「異文化コミュニケーション」インテンシブ
④「国際協力」インテンシブ
⑤「中国語」インテンシブ
⑥「フランス語」インテンシブ
⑦「ドイツ語」インテンシブ

3. 中国語コミュニケーションコースの概要

中国語コミュニケーションコース（以下「中国語コース」）で開講している科目は、以下の通りである。ちなみに、本コースに所属する学生数は一学年約 200～250 名で、学部全体（入学定員 700 名）の約 1/3 前後の学生が専修していることになる。

〈専門教育選択科目〉

「コース選択指定科目」（1、2 年次開講、計 6 科目、24 単位）
【1 年次】「中国語基礎 Ⅰ（春学期）・Ⅱ（秋学期）」（各週 2 コマ）
【2 年次】「中国語演習 Ⅰ（春学期）・Ⅱ（秋学期）」（各週 2 コマ）
【2 年次】「中国語会話 Ⅰ（春学期）・Ⅱ（秋学期）」（各週 2 コマ）

「インテンシブ科目」（3、4 年次開講、計 11 科目、40 単位）
【3、4 年次】

「中国語発展研究 A（文学・言語)」(4 単位)
「中国語発展研究 B（社会・文化)」(4 単位)
「中国語発展研究 C（歴史・思想)」(4 単位)
「現代中国研究」(4 単位)
「中国語特別演習」(4 単位)
「検定中国語演習（新 HSK 対策)」(4 単位)
「ゼミナール Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」(各 2 単位)
「卒業論文」(8 単位)

なお、英語科目については「アドバンストイングリッシュ A・B」(各 4 単位）が専門教育必修科目として用意されており、全コースの学生が履修しなければならない。このほか、専門教育選択科目として「オーラルコミュニケーションⅠ・Ⅱ・Ⅲ」(各 4 単位)、「リーディング＆ライティングⅠ・Ⅱ・Ⅲ」(各 4 単位)、「TOFEL スコアアップⅠ・Ⅱ・Ⅲ（各 2 単位)・Ⅳ（4 単位)」、「TOEIC スコアアップⅠ・Ⅱ・Ⅲ（各 2 単位)・Ⅳ（4 単位)」、「Study Skills」(4 単位）が 1、2 年次配当で用意されており、各自の学習目的に応じて選択履修が可能となっている。

4. 海外留学制度

本学では、一般的な語学研修や留学だけでなく、「世界の様々な国や地域で興味のある分野を学びたい」という学生のニーズに応じた留学プログラムも提供している。2012 年 3 月現在、単位互換協定を締結している世界の大学は計 334 校にのぼり、国と地域では 50 に及ぶ。短・長期留学をすべて含めると、大学全体の留学派遣総数は年間約 1700 人で、今後も「画一的ではなく、学生の個性を大切にしたプログラム」を提供すべく、世界各国の大学との交流ネットワークを広げてゆく予定である。

中国（台湾を含む）留学に関しては、単位互換協定を締結している大学は計 19 校あり、留学プログラムについても多種多彩なものを用意している。

〈中国提携大学〉計 19 校

内モンゴル師範大学　吉林大学　上海外国語大学　西安外国語大学
蘇州科技大学　大連外国語学院　中山大学　天津外国語大学
天津理工大学　南開大学　北京吉利大学　北京語言大学　北方工業大学
香港大学　香港中文大学　香港理工大学　嶺南大学
（台湾）静宜大学　（台湾）東海大学

〈留学プログラム〉

◆ 春・夏期語学研修〈私費留学〉(4～5 週間)
◆ 春・秋学期語学留学〈私費留学〉(10～22 週間)

◆　交換・推薦留学〈奨学金支給〉(1 年間)
◆　認定留学〈私費留学〉(1 年間)
◆　中国学位留学〈奨学金支給〉(2 年間)
　派遣先:北京語言大学、上海外国語大学
◆　2 カ年留学（2 年間）
　・「中国本土の大学＋香港の大学」　・「中国語＋韓国語留学」
◆　中国インターンシップ〈日本語教員〉(5 カ月)
◆　中国語学留学＋企業インターンシップ
　大連外国語学院（1 学期間）＋現地企業インターンシップ（1 カ月）

なお、過去数年の中国への留学派遣実績は次の通りである。

〈中国留学派遣実績一覧〉(2005～2012 年)

種別	春・夏期	春・秋学期	交換推薦	認定	学位	2 カ年	日本語教員	語学+インターン	その他	計
2005 年	60	84	32	13	4	0	－	－	0	193
2006 年	55	50	18	19	5	0	－	－	0	147
2007 年	35	75	10	7	3	0	8	－	14	152
2008 年	52	49	17	2	6	0	11	－	20	157
2009 年	62	82	23	3	4	0	9	2	0	185
2010 年	35	61	19	7	2	0	5	1	21	151
2011 年	36	85	31	12	4	0	11	4	31	214
2012 年	43	78	29	0	3	0	9	4	0	166
計	378	564	179	63	31	0	53	11	86	1365

留学期間中に修得した派遣先大学の単位については、§3 で紹介した開講科目の一部に加えて、「海外事情研究 A～F」(各 4 単位)、「海外留学特別研究 A～F」(各 4 単位)、「海外インターンシップ A (2 単位)・B (4 単位)」などの認定対象科目を用意して単位認定を行っている。また、海外留学に関しては、2 年間を限度として本学の在学年限に算入し、かつ60単位までを本学において修得したものと認定するため、中国語圏の留学だけでなく、例えば「中国語圏＋英語圏」留学のような組み合わせも当然可能となり、進級・卒業要件を満たしてさえいれば、最大で計 4 セメスターの海外留学プログラムに参加することができ、かつ 4 年間での卒業も可能となっている。なお、認定単位数については、派遣先大学における科目履修状況と成績評価によって異なるが、通常、留学期間が 1 カ月の場合で 4 単位前後、半年で 20 単位前後、1 年で 40 単位前後を認定しており、すべて卒業所要単位数に算入することができる。

5. 中国語資格試験の取得状況

ここまで、中国語コースのカリキュラム内容と中国留学プログラムを中心に、それぞれの概要を説明してきたが、では実際にどのような教育効果が得られ、どのような成果が挙がっているのか（言うまでもなく様々な視点から多岐にわたる分析や調査等が必要とされるが）、ここではその一部として、中国政府が公認する中国語検定試験「新 HSK」（「新漢語水平考試」）の取得状況を紹介する。なお断っておくと、「新 HSK」の資格取得状況を提示する理由として、本学が新 HSK の試験会場となっており（年 3 回実施）、外部受験者を含めて、本学会場で実施したすべての試験結果を正確に把握しているためであって、その他の各種中国語検定試験を否定するものではない。

「新 HSK」2012 年実施分（計 3 回）集計結果

等級	受験者数	合格者数	合格率
1 級	4	4	100%
2 級	12	12	100%
3 級	35	32	91.4%
4 級	73	51	69.9%
5 級	69	31	44.9%
6 級	29	7	24.1%
計	222	137	61.7%

※本学国際言語学部に所属する全学生を対象とした集計データ
本学以外の試験会場で受験した者については含まない

6. 授業外における取り組み

中国語コースでは、通常の授業以外に、次のような取り組みも行っている。

◆ 「クラスチューター」制度
一年次開講科目「中国語基礎 Ⅰ・Ⅱ」の全クラス（各 12 クラス）を対象に、2～3 名の中国人留学生をクラスチューターとして配置し、授業内外における中国語学習のサポートをする制度。

◆ 「ルームメートプログラム」
中国人留学生と日本人学生が二名で一部屋をシェアし共同生活を送る。相互学習に加えて、身近な生活で異文化体験ができるプログラム。

◆ 「中国語 e-learning」システム
授業外学習の一環として「中国語 e-learning」システムを導入している。パソコンとインターネット環境が整っていれば、いつでもどこでも気軽に自学自習ができる。

◆ 「中国交流ラウンジ」
月曜日から金曜日までの 5 限目（16：20-17：50）に、当番制で 3～5 名の中国人

留学生にキャンパス内に設けている「中国交流ラウンジ」で待機してもらい、日本人学生が気軽に立ち寄って、中国人留学生との交流を深めたり、中国語の予習・復習のサポートを受けたり中国留学の相談などができる場となっている。

なかでも「クラスチューター」制度は、学生からの評判が非常に高く、「正しい発音を身につけるのに役立った」、「聞く力・話す力の向上に役立った」など語学力の向上に大変役に立ったという意見のほかに、「中国語学習が楽しい」、「中国語学習に対する意欲が高まった」、「中国語をもっと話せるようになりたいと思う」、「中国に対するイメージが良くなった」などのように、学習意欲の向上や中国に対するイメージの変化に繋がったという前向きな意見も数多く見受けられ、期待以上の効果が上がっている。

（相原里美『中国語クラス・チューターの活動とその効果について』、第 2 回関西外大「授業実践研究フォーラム」2013 年 1 月参照）

このほか、2009 年 12 月に中国の北京語言大学と提携して開設した「孔子学院」でも、広く社会にも開放するかたちで、各種イベントや活動（日中文化知識コンテスト、中秋節・春節交流会、西日本地区中国語歌唱コンクール、中国写真コンクール、学園祭での中国食文化紹介フェアなど）を実施し、語学力の向上のみならず、学生たちが中国に対する理解をより一層深めることができる取り組みを行っている。

7. 問題点と今後の課題

以上、中国語コースを中心に、本学国際言語学部における多言語教育の取り組みとその成果について説明したが、現状としては、ビジネスシーンなどにおいてある程度通用するレベルの中国語を習得する学生は、中国語コース全体の 1 割にも満たず、「英語＋中国語」の習得となると、ほぼ皆無に等しいのが実情である。周知の通り、日本の最大貿易相手国である中国が世界の工場から世界の市場へと転換したなかで、中国語の習得が就職活動において大変有利な材料となることは確かだろうが、やはりその前提は「英語＋α」としての中国語であろう。本学のこうした現状を踏まると、今後は多言語教育においてより実現性の高い「英語＋α（中国語）」の習得で求めるべき語学力とはいったいどの程度（に抑えるべき）なのかを検討してゆく必要があり、学生たちに対する意識調査なども実施した上で、より実効性が高い履修モデル、教育内容を構築してゆくことが大きな課題であると言えよう。

学習意欲が比較的高い学生たちに対する中国語コースの問題点としては、上位年次配当科目（「インテンシブ科目」）の開講クラス数が一クラスのみの場合が多く、おのずとクラス内の習熟度や学習意欲に大きな差異が生じてしまうことになる。こうなると、とりわけ留学帰国生にとって授業の難易度に物足りなさを感じるケースが生じ、場合によっては、学習意欲の低下（より正確に言うならば「勉強をしなくなる」）にも繋がりかねず、早急な対応と改善が求められている。

また、第二言語が母語以上のレベルになることはあり得ないと言われるように、いわば外国語教育において基礎学力とも言える国語力の強化についても、昨今の大学生の国語力低下を批判するだけでなく、大学全体で問題意識を共有し、より一層真剣に取り組むべき

課題であろう。語学科目を担当する教員として、まずできることは、日頃から学生たちに対して「第二言語が母語以上のレベルに…」と指摘することであり、少なくとも学生たちもこの点を十分に認識するようになることが大きな第一歩となろう。